

メンバー手記(3)

喜多山 洋平

7月29日の日は午後7時に上野に集合であったが、自分は石井スポーツでの買い物が長びいた為に1時間程遅れて8時に上野に到着。有村さん、栗原さんはすでに着いており、村上さんは8時50分ごろ、電車の時間ぎりぎりに到着。何ごともなく電車に乗り込む。夜行列車、富山電鉄、ケーブルカー、バスを乗り継ぎ、30日の朝室堂を出発。天気は晴れだったと記憶している。室堂から剣御前まで400mのきつい登りが続き、自分はすでにバテ気味。足の捻挫のせいもあるがトレーニングを積まなかったことを後悔する。そこから剣沢小屋までおりる。常に先頭の栗原さんから遅れ気味の俺はすぐ後ろについて来る村上さん、有村さんにプレッシャーを感じる。結局その日は真砂沢まで行き、そこでテントを張る。あまりに疲れていた俺は、テントを張るとすぐに太陽の下で寝ころがり30分程うとうとする。そこで有村さんが持って来ていたビールを冷やして飲み、気分は良好。その日の夕方、栗原さんが持って来ていたラジオが不調と分かったため、その日は小屋の人にテレビで天気予報を見せてもらった。次の日は天気がくずれそうだということなので4人共やる気をなくしていたが、有村さんはみんなに「もしかしたら晴れるかもしれない」と言ってハッパをかけていた。

31日、3時起床。外を見ると雨は降っておらず、とりあえずはベースを熊の岩まで上げることに決定。雑煮を食って5時ごろ出発するが、1時間もすると雨がパラつきだす。俺をのぞく3人はカッパを着るが、自分はザックの一番下にあるカッパを出すのが面倒臭くて、そのまま登る。約3時間半程かけて熊の岩に到着。急いでテントを張り、中に入る。皆ずぶぬれであり、非常に寒かったのを覚えている。その日は結局1日雨だったので、テントの中で停滞。晩飯はモチラーメンにする予定だったが、皆でモチを切りきざんでは焼いて食べてしまったためラーメンになってしまった。

8月1日の日は朝から雨で1日中停滞。その日の午後3時ごろから晴れ上がる。他のパーティーがCフェース、Aフェース(中大ルート)などを登っているのを見た。その日の晩飯はカレーモチウドンを食べた。

8月2日。待ちに待ったド快晴。朝食に雑煮を食い、帰って来た時の為にコーヒゼリーを作って4時ごろテントを出発。前日のジャンケンの結果、有村さんと俺がザイルを結ぶことになっていた。(これは、俺を除く3人の実力がほぼ同じで、誰が俺と組んでも同じであろうという意見のもとでジャンケンで決まったものである)

その日は、最初にCフェースの剣稜会ルートにとりつく。先に登っていた村上、栗原組に遅れること約1時間。八時ごろCフェースを登り終える。すでに前の2人は降りてしまっていた。そこで自分はキジがうちたくなかったので、有村さんに待ってもらい、人目につかないところまで行きキジをうつ。要した時間は合わせて約15分。それからすぐに、V・VIのコルに向かって降

り出すが、そのルートの恐ろしいこと。あんなルートをノーザイルで降りていては絶対落ちると思い、俺は有村さんに引き返そうと言った。有村さんも、そこからまた10メートル程下まで行き、そこで「こりゃあだめだ」と言い、引き返すことを決定。「本当にこれが下降ルートなんですか」と俺が聞くと、「わかんねェ」という答え。「でもこりゃあ多分間違えた」と言って登り始める。ノーザイルでは危険だということでザイルを1本とりだし、それから登り出した。上まで登ると今度は正しいルートを見つけて下降。A フェースの取りつきには11時すぎに着き、そこで村上、栗原組と合流。その時点で前の2人は既にA フェースの中大ルートを登り終えていた。そこで昼食をとることにしてレーションを食べる。有村さんが粉ジュースを作り、皆で同し飲みした。

11時50分ごろ、下で皆が見る中で俺がトップでA フェース中大ルートを登り始める。そこで、村上、栗原組はD フェースに行き、俺達と分かれる。俺が約15メートル程登ったところで有村さんが「そこでアンカーを取って確保しろ」と言うのでその通りにする。そこから有村さんとトップが変わる。その先、セカンドで登っていて初めてトップを入れ変えた意味を理解した。その部分は非常に難しかった。途中で再び俺とトップが入れ変わり、結局3ピッチで上まで上がった。途中非常に混んでいて、有村さんも上がって来るなり「ムカついた」と一言。すぐにV・VIのコールへ降りる。前回降りたのとは又違ったルートだったが、有村さんは「これが本当のルートだよ」と言っていた。途中俺が「降りるのは登るのよりやっかいですねェ」と言うと、「このルートは級にすると1級だけど、このぐらひはノーザイルで降りらんないやだめだよ」。下降の途中、A フェースの方で二回程大きな落石の音を聞いて、二人で「おっかねェな」と言い合っていた。ここで有村さんが「転落して死ぬのは自分が悪いんだけど落石だけはどうしてもねェもんや」と言っていたのが後になって非常に心に残る言葉になってしまった。

2時すぎにA フェースの取り付きに戻り、そこで再び軽くレーションを食べる。有村さんがカロリーメイトを口の中でモゴモゴさせながら、水を飲んで「ノドがかわく」と一言。俺が「アメなめますか」と聞くと「ノドがかわくからいらない」という返事。2人共靴をぬいでいたのだが、俺の足のマメを見て「オォー痛そう」という有村さんに、俺も「痛い痛い」という返事。それからすぐに、靴をはくなど準備中に有村さんが「コーヒゼリー食いて、な」と言うので俺も「確かに」と言うと、すかさず有村さんは「こういう気のたるみはいかんや」。しかし、正直言ってそこには緊張感は無かった。中大ルートから降りて来た時点で有村さんが「今日はD フェースはやめよう」と言うので、俺が「何ですか」と聞くと、山の下からわいてくる霧を指して、「夏の午後だいたい3時すぎるとああいう霧がわいてきて、雨が降らなくても岩をしめらせて危ないんだよ」と説明してくれた。俺が思うに、D フェースをあきらめた時点で緊張感はなくなっていたのではないかと思う。正直言って俺もそうだった。

それからすぐ、だいたい2時半すぎごろ有村さんが「喜多さん、行くぞ」と言うので俺が「今度は有村さんがトップ行きますか」と聞くと「さっきはお前が最初やっただろ」と言うので、俺も「そうですね」と言いそこでアンカーを取り確保の体勢をとる。「いいですよ」と言うと「行

くぞォ」と言って有村さんは上機嫌ですたすと上に登って行った。いったんクラックの陰で見えなくなってしばらくすると(おそらくテラスの少し上あたりで)再び見えるようになる。そこでランニングビレーを取るような動作をしたかと思うと、いきなり「あっ」という声と共に体が宙に浮いていた。俺は、一瞬「やベェ」と思い確保の体勢に入ったが、ランニングビレーを取り付きより高さ1メートル程のところに取っただけで、あとは全然取っておらず、顔面から直接地面につきだした岩に激突、おそらく20~30メートル程は落ちたであろう。俺よりも近くにいた他の山岳会の人々が一人、有村さんに「君、大丈夫か」と言っていたのが聞こえた。

ただうろたえる自分に、他のパーティーの人が「ヘリを呼べ」と叫ぶのでトランシーバーで呼ぼうと思ったが、トランシーバーの使い方がわからず、他のパーティーにトランシーバーを借りてCh1で緊急連絡を入れる。「こちら筑波大学ワンダーフォーゲル部、ただ今メンバーの一人がハッ峰のAフェースから転落。危ない状態なので直ちにヘリを1台よこして下さい」と伝えるが相手側は有村さんの身元をくわしくたずねるだけでなかなかヘリを飛ばしてくれる気配がない。俺が怒って「患者は大変危ない状態なんです。いいから早くヘリを飛ばして下さい」と言うと、そこで初めて「雲海のため現在の状態ではヘリは飛ばせない」とのこと。それではどうすればいいのかと聞くと、ヘリが来た時の為に患者を熊の岩の雪溪のところまで運べと言うので、周りの人に手伝ってもらって運ぼうとしたが、雪溪が急すぎて手前の小さな雪溪はわたれても長次郎雪溪は無理と判断。長次郎の手前の岩場の平らなところに有村さんを安置してシュラフやジャケットなどをかぶせて暖める。岩から落ちた時の有村さんは、顔面血だらけで前歯はみんなぬけており、左目もつぶれている様子だった。意識はすでになく、「アー」とも「ウー」とも聞きとれる声を連続的に出していた。

搬送し終わってしばらくすると、いきなり「痛えなバカ野郎」と有村さんが叫ぶので、意識が戻ったのかと思って見ると意識はやはりなく、俺の声にも何も反応しない。それから何十回も同じ口調で「痛えなバカ野郎」と言い続けていた。又左手首が折れているのが明らかだったので木を当てた。体も本当に痛そうで、ひどくあばれるので2、3人の人に手伝ってもらい動かないようにおさえていたが、あれ程つらいことはなかった。俺は「もうすぐヘリが来るよ」と言い続けていた。そのうち静かになったなあと思ったら心臓の脈が弱くなり、ついには息も止まってしまった。そこに偶然居合わせた慶応大学の医学部山岳会の人達が心臓マッサージや人工呼吸をやってくれたが、再び息はふきかえらず、警備隊や村上さん、栗原さんがやって来た時にはすでに手遅れの状態だった。

午後5時ごろ、山岳警備隊の1人が、小屋で待機している医者と連絡を取りあって有村さんの死を確認。俺と栗原さんが最後に心臓に耳をあてて確認をした。あてている耳の下で、鳴っているはずの心臓の音が聞こえない。耳を離すとその瞬間に心臓が動き始めたのではないかという気がしてもう一度耳をあてるがやはりそこには何の音もない。思わず手をにぎるとその手はすでに冷たくなりかけていた。そこで始めて「有村さん、死んじゃったんだなあ」と実感し、涙を止め

どもなく流している自分に気がついた。

しかし我々はまだ山にいるのである。感傷にひたるのはまだ早い。我々はそこですぐにテントを撤収して長次郎雪溪を下りだした。有村さんの遺体はその場でツェルトにくるまれて、警備隊の人3人と他のパーティーの人数人とで我々がテントを撤収している間に運ばれていた。4人分の荷物を3人のザックの中に入れるのは無理だったので、有村さんのザックはザイルに結んで俺と村上さんが引っぱっておりた。その間栗原さんは、メンバーの1人は先に行って警備隊の人達においついた方が良いということで、先に雪溪を下って行った。俺と村上さんが雪溪を下り終えた時には、すでに有村さんの遺体は雪の中にうめてあり、翌日晴ればヘリが飛ぶが、晴れなければ我々が遺体搬送をする、という事を伝えられた。とりあえずは剣沢小屋へ戻ろうと歩き始めたのだが、その時になって(日は暮れて周りは真暗になっていた)自分はそでなしのTシャツ1枚しか着ていないことに気づいた。昼間とはうって変わって非常に寒かったのだが、テントを撤収する際に上着をどのザックに入れたのか覚えておらず、「どうせ小屋までの数時間だ」という考えも混じってそのまま行くことにした。しかし、小屋まであと30分というところまで歩いたところで、急に目が回り始めて体が動かなくなってしまった。その時同時に異常な空腹感も覚えていたので、目が回るのもそのせいだと思っていたのだが、結局どうしても体がいうことをきかず、村上さんに助けられてもう目の前まで来ている小屋にたどりついた。小屋に着いたのは20時ごろだったと思う。減っているはずの腹であったが、小屋で出された飯はほとんど手がつけられなかった。

翌日の朝シュラフから出ると、体が熱っぽいのでそこで初めて「昨日目が回ったのは腹が減っていたせいじゃなくて熱があったからなんだ」と気づいた。その日は朝から晴れていたのでヘリが飛ぶというので、最初栗原さんが警備隊の人達と、有村さんの遺体を長次郎雪溪の出会いまで取りに行き、その後小屋の前で待っている俺と村上さんを拾ってヘリで室堂まで帰った。そこで我々3人は警察署に行った。

反省

あれは確か6月の初めだったと思う。月曜日のミーティングが終わった後に、村上さんに呼び止められて「今度有村達が行く剣の山行に俺も行きたいと思うんだけどお前行く気ないか」と誘われた。有村さんが栗原さんと一緒に剣に行く計画が出ていたのは知っていたが、それに村上さんが加わるとなると、我がクラブの最強トリオがそろうことになる。そんな山行に果して俺なんかが行けるのだろうか、という不安はあったが、それ以上にそんな3人と一緒に山に行けるなんてめったにあるチャンスじゃないという思いが強く、すでに行く気になっていた。俺は4月29日に古賀志山の岩のゲレンデで転落して足首を捻挫して以来、痛みがずっととれずにいたのだが、夏休みまでには治るだろうと勝手に予測して、それまでは上半身の筋肉をきたえておこうと思い、筋力トレーニングを始めた。

村上さんに誘われてからしばらくして、俺は直接有村さんの部屋に行き、いきさつを話してから「連れて行って下さいよ」とたのむと「いいよ」との答え。これで俺は剣に行くことに決定した。しかし気になっていた足のケガの容態は思わしくなく、足首の痛みは7月に入ってもとれなかった。ふだん生活している分には何ら支障はないのだが、いざザックを背負って山を歩くとすると足の痛みはかなり苦痛であった。岩登りの合宿に行くためには、その準備のための山行(岩登り)に全て参加しなければならないとのことだったので、無理をして参加していたのだが、足の痛みは不安材料として常に俺の心に引っかかっていたのは事実である。そしてついに剣に行く日まで1週間とせまった。あせった俺は、東京にあるスポーツマッサージの病院へ行き「何でもいいからあと1週間で足の痛みをとって下さい」と頼むと、その医者は痛み止めのハリをうってやると言って足に数ヶ所ハリをうってくれた。おかげで気分的には少し楽になったが、しかしついにはそのケガのために一度も走り込まずに俺は剣に入ったのである。剣御前への登りでバテてしまったのは、そういうことを考えれば当然の結果であろう。そして登りの時こそ足は痛まなかったが、雪渓やガレ場などを下っている時はズキズキと痛んでいた。しかし、それは自分の責任なので、我慢していた。そしてこの事故である。確かに今回の事故と俺のケガとは何の関係もない。しかし、今回の事故は俺に考える時間を提供してくれた。そして俺は考えた。今回の事故とは別に、俺には「自分が山へ登ることへの自覚が欠けていたのではないか」という思いがした。もしも俺がアプローチの途中でもう一度足をくじきでもして歩けなくなったら、どれ程皆に迷惑をかけたか。また、岩を登る際、普段、足の痛みはほとんど感じなかったが、もしも何かのひょうしに痛みを感じて転落でもしていたらどんなことになっていたか……。そういう事を考えると俺は全く無責任なことをしていたんだあと初めて気がついた。服装一つを取ってもそうである。俺は長次郎雪渓を登る時点で、カップを着ずに雨にうたれて痛い目にあっているにもかかわらず、下山する時も薄着をしていて、結局は村上さんに迷惑をかけた。

その様な「いい加減な気持ち」が俺になれば、今回の事故は起こらずにすんだかもしれない。確かに魚津高ルートに登る時に有村さんに緊張感は欠けていた。しかし、それが俺が緊張感を失っていたことの言い訳には、これっぽっちもならない。有村さんが、ランニングビレーを取っていなかったことに対してもしかりである。確かに、俺は有村さんの姿は岩のかげで見えなかった。しかし、「ビレーは取ってるんだろうな」などという心配もしなかったのは事実である。そこには、「有村さんだから」という気持ちもあったからに違いないが、それ以前に、落ちるなどということは、万に一つも考えていなかったというのが本音である。俺のことを信頼しきって登っていた有村さんに対して、俺はそんな「いい加減な気持ち」で確保をしていたのである。あやまりたくても、もう有村さんはいない。あの「喜多さん、行くぞ」と言ってニコニコしながら登り始めた有村さんが、5分後には変わり果てた姿になってしまったのである。山に落ちることの責任—それが、自分の考えていたものよりはるかに大きく、そして重大なものであるということに、やっと気がついた様な気がする。